「徐霞客遊記」訳注稿

巻二下　楚遊日記

＊崇禎一〇（一六三七）年正月十一日～閏四月七日、一一五日間　徐霞客五十二歳

楚遊日記（2）

●崇禎一〇（一六三七）年二月一日～二十九日、二九日間　徐霞客五十二歳

●凡例

・**■本文の**部では、一定の日ごとに区切り、本文を掲げ、**●校勘**を施す。

・**■訳注の部**では、一定の日ごとに区切り、さらに内容上のまとまりでも区切り、**●訓訳、●語注、●口語訳**の順で記す。

・本文は、褚紹唐・呉王寿整理の上海古籍出版社本（一九八〇年（「上海新整理本」と略）とする。

・本文について、底本である季本にはなく、乾隆刊本にある部分、季本より、乾隆本が詳しい部分に〔　〕で示されている。

・訳注では、〔　〕を外し、そのまま本文に組み込んで訳す。

・徐霞客の自注は［　］で示す。

参照文献等（「　」は略称）

◇訳注には諸書を参照する。

・朱恵栄等訳注『徐霞客遊記全訳』貴州人民出版社、一九九七年（「朱恵栄」）

・黄珅訳注『新譯徐霞客遊記』三民書局、二〇〇二年（「黄珅」）

◇参考文献

・『大明一統志』天順五年（一四六一）

　巻之六十三長沙府、巻之六十四衡州府、巻之六十五永州府、巻之六十六郴州府

・李元度撰『重修　南嶽志』光緒九年（一八八三）（「南嶽志」）

・王開運等修『(湖南）清泉縣志』同治八年（一八六九）（「清泉県志」）

・彭玉麟,等修『(湖南）衡陽縣志』同治一三年（一八七四）（「衡陽県志」）

・『中華人民共和国地名詞典　湖南省』一九九二年（「地名湖南」）

・譚民政著『陪徐霞客游湖南』湖南文芸出版社、二〇一七年（「譚民政」）

　楚游日記における徐霞客の足跡を追って現況を報告するもの。写真多数。

・任国瑞・謝武経著『湖南的明朝與當代―徐霞客《楚游日記》考察記』方志出版社、二〇一八年（「任国瑞」）

　楚游日記における徐霞客の足跡を追って現況を報告するとともに、楚游日記の校注と口語訳を行ったもの。校注と口語訳は、ほぼ朱恵栄を踏襲する。写真多数。

◇参考地図

○徐霞客地図

・丁文江撰『徐霞客游記二十卷』付図、上海商務印書館、一九二八年（「丁本付図」）

・褚紹唐主編『徐霞客旅行路線考察図集』中国地図出版社、一九九一年（「路線図」）

○外邦図（陸軍参謀本部陸地測量部製作）

・「長沙」五十万分一（「長沙」図）

・「衡州」五十万分一（「衡州」図）

・「桂林」五十万分一（「桂林」図）

・「南灣」五万分一（「南灣」図）

・「草市」五万分一（「草市」図）

・「衡山県」五万分一（「衡山県」図）

・「呉集」五万分一（「呉集」図）

・「南嶽市」五万分一（「南嶽志」図）

・「白果市」五万分一（「白果市」図）

・「樟木市」五万分一（「樟木市」図）

・「衡陽城」五万分一（「衡陽城」図）

○現代地図

・湖南省地図集編纂委員会『湖南省地図集』湖南地図出版社、二〇〇〇年（「大地図」）

・中国地図出版社『湖南省地図冊』中国地図出版社、二〇〇一年（「小地図１」）

・湖南地図出版社『湖南省地図冊』湖南省地図出版社、二〇〇八年（「小地図２」）

・「永州旅游交通図」湖南地図出版社、二〇一二年（「永州」図）

●訳注稿

第一部　衡州府城（衡陽県城）滞在（二月一日～十日）

［二月一日］

＊長文なので二つに分ける。

〈その一〉

《概要》衡州府城及び周辺の探索。

■本文の部

二月初一日

早飯於緑竹菴、以城市泥濘、不若山行。遂東南逾一小嶺、至湘江之上。共一里、溯江至蒸水入湘處。［隔江即石鼓合江亭。］渡江登東岸、東南行、其地陂陀高下、四里、過把膝菴、又二里、逾把膝嶺。嶺南平疇擴然、望耒水自東南來、直抵湖東寺門、轉而北去。湖東寺者、在把膝嶺東南三里平疇中、門對耒水、萬曆末無懷禪師所建、後憨山亦來同棲、有靜室在其間。余至、適桂府供齋、爲二内官強齋而去。乃西行五里、過木子・石子二小嶺、從丁家渡渡江、已在衡城南門外。登崖上廻雁峯、峯不甚高、東臨湘水、北瞰衡城、俱在足下、雁峯寺籠罩峯上無餘隙焉、然多就圮者。又飯於僧之千手觀音殿。乃北下街衢、淖泥沒脛、一里、入南門、經四牌坊、城中闤闠與城東河市並盛。又一里、經桂府王城東、又一里、至郡衙西、又一里、出北門、遂北登石鼓山。山在臨蒸驛之後、武侯廟之東、湘江在其南、蒸江在其北、山由其間度脈、東突成峯、前爲禹碑亭、大禹《七十二字碑》在焉。其刻較前所摹望日亭碑差古、而漶漫殊甚、字形與譯文亦頗有異者。其後爲崇業堂、再上、宣聖殿中峙焉。殿後高閣甚暢、下名廻瀾堂、上名大觀樓。西瞰度脊、平臨衡城、與廻雁南北相對、蒸・湘夾其左右、近出窗檻之下、惟東面合流處則在其後、不能全括。然三面所憑擊、近而萬家煙市、三水帆牆、［湘江自南、蒸江自西、耒江自東南。］遠而岳雲嶺樹、披映層疊、雖書院之宏偉、不及［吉安］白鷺大觀、地則名賢樂育之區、而兼滕王・黄鶴之勝、［韓文公・朱晦庵・張南軒講学之所。］非白鷺之所得侔矣。樓後爲七賢祠、祠後爲生生閣。閣東向、下瞰二江［蒸・湘］合流於前、耒水北入於二里外、與大觀樓東西易向。蓋大觀踞山頂、收南北西三面之奇、而此則東盡二水同流之勝者也。又東爲合江亭、其址較下而臨流愈近。亭南崖側、一隙高五尺、如合掌東向、側肩入、中容二人、是爲朱陵洞後門。求所謂「六尺鼓」不可得、亭下瀕水有二石如豎婢、豈即遇亂輒鳴者耶？自登大觀樓、正對落照、見黑雲銜日、復有雨兆。下樓、踐泥濘冒黑過青草橋、東北二里入緑竹菴。晩餐既畢、颶風怒號、達旦甫止、雨復瀟瀟下矣。

■訳注の部

●訓訳

二月一日

早に緑竹菴に飯す。

城市泥濘なるを以て、山行に若かず。遂に東南に一小嶺を逾え、湘江の上りに至る。共に一里にして、江を溯り、蒸水湘に入るの處に至る。[江を隔つるは即ち石鼓合江亭なり。]

江を渡りて東岸に登り、東南に行く。其の地は陂陀高下す。四里にして、把膝菴を過ぐ。又た二里にして、把膝嶺を逾ゆ。嶺の南は平疇擴然たりて、耒水の東南に來り、直ちに湖東寺の門に抵り、轉じて北に去るを望む。湖東寺なる者は、把膝嶺東南三里の平疇の中に在り。門は耒水に對す。萬曆末に無懷禪師の建つる所にして、後に憨山も亦た來りて同に棲む。靜室の其の間に在る有り。余至るに、適々桂府齋を供し、二内官のために強ひて齋し去る。

乃ち西行すること五里にして、木子・石子の二小嶺を過ぐ。丁家渡より江を渡れば、已に衡城南門の外に在り。

崖を登りて廻雁峯に上る。峯は甚しくは高からず、東は湘水に臨み、北に衡城を瞰る。俱に足下に在り。雁峯寺峯上に籠罩たりて餘隙無し。然れども圮に就く者多し。又た僧の千手觀音殿に飯す。

乃ち北に街衢に下る。淖泥脛を没す。一里にして、南門に入る。四牌坊を經る。城中の闤闠と城東の河市と並びに盛んなり。又た一里にして、桂府王城の東を經る。又た一里にして、郡衙の西に至る。又た一里にして、北門を出で、遂に北のかた石鼓山に登る。

山は臨蒸驛の後ろ、武侯廟の東に在り。湘江は其の南に在り、蒸江は其の北に在り。山は其の間より度せる脈の、東に突して峯を成すなり。前は禹碑亭たり。大禹の《七十二字碑》焉に在り。其の刻は前に摹する所の〈望日亭碑〉に較べて差々古し。而して漶漫殊に甚し。字形と譯文とも亦た頗る異なる者有り。其の後ろは崇業堂たり。

再び上れば、宣聖殿中に峙す。殿の後ろは高閣甚だ暢ぶ。下の名は廻瀾堂、上の名は大觀樓たり。西に度れる脊を瞰れば、平らかに衡城に臨み、廻雁と南北相い對し、蒸・湘其の左右を夾み、近づきて窗檻の下より出づるがごとし。惟だ東面の合流の處は則ち其の後ろに在りて、全く括する能わず。然れども三面の憑擊する所は、近くして萬家の煙市、三水の帆牆あり、[湘江は南よりし、蒸江は西よりし、耒江は東南よりす。]遠くして岳雲嶺樹、披映層疊たり。書院の宏偉なることは、吉安の白鷺大觀に及ばずと雖も、地は則ち名賢育を樂しむの區にして、滕王・黄鶴の勝を兼ね、[韓文公・朱晦庵・張南軒講学の所なり。]白鷺の侔を得る所に非ざるなり。樓の後ろは七賢祠たり、祠の後ろは生生閣たり。閣は東に向き、下に二江[蒸・湘]の前に合流し、耒水の北のかた二里の外に入るを瞰る。(生生閣は)大觀樓と東西向きを易ふ。蓋し大觀は山頂に踞り、南北西三面の奇を収め、而して此は則ち東に二水同流の勝を盡くす者なり。

又た東は合江亭たり。其の址は較々下にして流れに臨むこと愈々近し。亭の南崖の側に、一隙の高さ五尺なる、合掌するが如きあり。東向きにして、肩を側して入れば、中に二人を容る。是れ朱陵洞後門なり。謂ふ所の「六尺鼓」を求むるも得べからず。亭下に水に瀕して二石の豎婢の如きもの有り。豈に即ち亂に遇ひて輒ち鳴る者ならんや。

大觀樓に登りてより、落照に正對し、黑雲の日を銜むを見る。復た雨の兆し有り。樓を下り、泥濘を踐み黑を冒して青草橋を過ぐ。東北に二里にして緑竹菴に入る。晩餐既に畢り、颶風怒號し、旦に達して甫めて止む。雨は復た瀟瀟として下る。

●語注

○石鼓　石鼓山。「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔石鼓山〕在府城東北三里。有東巖西溪朱陵後洞。」とあり、「水経注」を引く。「衡陽城」図他地図に見える。蒸江と湘江との合流地点に嘴のように長く伸びる岬の先端部。石鼓書院や禹碑などがあり、景勝の地でもある。

○合江亭　「大明一統志」巻六四宮室に「〔合江亭〕在石鼓山蒸湘二水合流處。唐刺史齊映建。」とあり、韓愈の詩を引く。

○把膝嶺　湘江と耒江に夾まれた場所について、譚民政は、現在は全く整地されているが古老の話として、一九二九年に国民政府がこのあたりを切り開いて衡陽飛行場を作り、八甲嶺飛行場と呼ばれたという。この「八甲嶺」が「把膝嶺」ではないか、と想像している（一二八～一二九頁）。「衡陽城」図に、八尺嶺が見える。

○擴然　広々とした様。

○湖東寺　「清泉県志」巻三祠祀寺観に「〔湖東寺〕縣東十里。唐大暦中、法照禅師卓錫（居留すること）處。明僧憨山住此、多題詠」とある。「衡陽城」図に見え、戦前は寺院として存続していたらしい。譚民政が訪ねたところ石柱や瓦礫が残るのみだったという（一二九～一三〇頁）。

○耒水　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔耒水〕在府城北。源出郴州之耒山。西北流。」とある。

○萬暦末無懐禪師所建　先に引いた「清泉県志」では、法照禅師が唐大暦中に居留したといい、「南嶽志」巻十五釈では「〔蓮宗寶鑑〕法照大師唐大暦二年棲衡州雲峯寺」とあり、唐代には存していたことになる。ここにいう「所建」は再建であろうか。

○憨山　徳清（一五四六～一六二三）。臨済宗の僧侶。憨山は号、諡号は弘覚禅師。金陵全椒の人。十九歳で得度し、五台山、曹渓（現在の広東省韶関市曲江区）、廬山などで活動した。雲棲祩宏、紫柏達観とともに、万暦の三高僧と称された。万暦四一年（一六一三）から同四四年（一六一六）まで、衡陽酈湖の万聖寺で活動したというが、それが先にあった湖東寺のことであろう。

○齋　黄珅は齋醮と解す。僧人に請うて齋壇を設けて神仏に祈祷すること。任国瑞は齋飯と解す。

○内官　宦官。

○爲二内官強齋而去　黄珅は、寺の僧侶たちが、派遣されてきた二人の宦官に無理矢理に齋醮を挙行させられている、と解す。任国瑞は、派遣されてきた二人の宦官が、われわれ（徐霞客たち）を無理に齋飯にさそって食べさせた、と解す。なお、朱恵栄らは、寺の僧侶達が、宦官に無理に齋飯を食べさせられていると解している。徐霞客らはこののちに千手観音殿で食事をしているので、いま黄珅に従う。

○木子・石子二小嶺　「清泉県志」巻一地理山之属嶺に「〔石子嶺〕江東鎮」とある。

○丁家渡　「清泉県志」には見えないが、回雁門外にあるものとして「大馬頭渡」「利済義渡」がある（巻二建置津）。

○廻雁峯　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔回鴈峯〕在府城南。鴈至衡陽、不過遇春而回。或曰、峯勢如鴈之回。故名。……徐靈期云、南嶽周廻八百里、回雁爲首、嶽麓爲足。」とあり、諸図に見える。

○雁峯寺　「大明一統志」巻六四衡州府寺観に「〔鴈峯寺〕在回鴈峯上。唐建、本朝重修。」

とある。
○籠罩　罩も竹かご。転じて、籠をかぶせたように盛り上がるさま。
○圮　毀壊。
○淖泥　どろ、ぬかるみ。
○闤闠　街市（市街）、街道。
○城東河市　一月三十日条に「遊城外河街」とある。
○武侯廟　諸葛亮廟。「大明一統志」巻六四衡州府祠廟に「〔諸葛亮廟〕在石鼓山。漢昭烈牧荊州時、亮駐臨蒸調賦、以供軍実。後廟食於此。宋重建、張栻作記。本朝永楽中重脩。」とある。
○大禹《七十二字碑》　「大明一統志」巻六四衡州府古蹟に「〔禹碑〕在岣嶁峯。又傳在衡山縣雲密峯。」とあり、「輿地紀勝」を引く（今の「輿地紀勝」では見つけられなかった）。そこでは「在夔門（南宋の夔州路の瞿唐関）」とし、宋の嘉定年間（一二〇八～二四）の初めに蜀の人がこの地で石碑の文字七十二字を見、写し取ろうとしたが、曖昧で良く読めなかったという。
○較前所摹望日亭　上海整理本では、「望日亭」はここが初出である。
○漶漫　ぼんやりとしてはっきりしないさま。
○譯文　朱恵栄は「解釈的文字」と訳す。碑文の内容であろう。
○括　朱恵栄は「観覧」、黄珅は「収眼底」と訳す。括は、おさめる、の意味がある。黄珅による。
○憑擥　黄珅は、「擥、通“牽”」といい（朱の説）、引くの意味だとしつつ、「憑擥」は「憑擥」の誤りではないかとする。そうであれば、「擥」は「攬（取り込む、集める）」となる。「居高攬勝（高きに居りて勝を攬（と）る）」と訳す。これに従う。
○萬家煙市　あるいは語順に誤りがあるか。黄珅に従い、「市中の万家からたちのぼる煮炊きの煙」とした。
○披映　黄珅は、紛披（盛多貌、又散乱）掩映（或遮或露）と訳す。これを踏まえ、盛んで顕れたり隠れたり、と訳した。
○書院　石鼓書院。「大明一統志」巻六四衡州府書院に「〔石鼓書院〕在石鼓山。宋朱文公に記がある。応天・嶽麓・白鹿洞とあわせて四大書院。
○吉安白鷺大觀　白鷺書院は、江西吉安府吉安にあった。南宋淳熙の創建。文天祥が読書したという。（「江右遊日記」崇禎九年十二月二日条）
○滕王　滕王閣。唐の永徽四（六五三）年、洪州都督だった李元嬰（高祖の子）によって、洪州城の西門「章江門」の北西、贛江の東岸に創建された高殿。いくども消失や崩落したが、場所を移しつつ再建され続け、現在のものは、一九八九年に唐代の遺跡近くの江西省南昌市の贛江に面して建てられている。唐の王勃の「滕王閣序」（駢文）と「滕王閣」（七言古詩）で名高い。岳陽の岳陽楼（湖南省岳陽市の洞庭湖北岸）・武漢の黄鶴楼と並んで、江南の三大名楼とされる。
○黄鶴　黄鶴楼。長江と漢水の合流地である武漢に建てられている楼閣。三国時代、呉の孫権によって軍事目的の物見櫓として建築されたのに始まるが、後には主に観光目的の楼閣になり、唐代には壮麗な建築物であった。少しずつ場所も変えながら再建され続け、現在は元の地点から約一キロ離れた位置に立つ。李白の代表的な漢詩「黄鶴楼送孟浩然之広

陵」などで名高い。
○侔　同等である、ひとしい。
○朱陵洞後門　「清泉県志」に見える。二十一日条に水簾洞とあるのが、朱陵洞。ここは朱陵洞後門とあるので、朱陵洞と奥でつながっているという認識なのだろう。
○六尺鼓　「水経注」巻三十八に「湘水出零陵（略）又東北過酃縣西」とあり、注に「縣有石鼓、高六赤（尺と同音）、湘水所逕、鼓鳴則土有兵革之事」とある。
○二石如豎婢　盗賊に襲われて衡陽に引き返したときに、徐霞客は再び石鼓山を訪れ、この石について少し詳しく述べている（二月二十二日条）。
○遇亂輒鳴　前掲六尺鼓参照。
○瀟瀟　雨が寂しく降る音。

●口語訳

［二月一日］

《1》衡陽府城探索

早朝に緑竹菴で食事を取る。

城市は泥濘なので、山行がよいと判断した。遂に東南へ一小嶺を越え、湘江のほとりに至る。あわせて一里、湘江を溯り、蒸水が湘江に入る場所に至った。［江を隔てた向こうは、石鼓山と合江亭である。］

●湘江東岸、湖東寺

湘江を渡って東岸に上陸し、東南に行く。この地は坂道が上下している。四里で、把膝菴を過ぎる。さらに又た二里で、把膝嶺を越える。嶺の南は平坦な耕作地が広がっており、耒水が東南に流れてきて、湖東寺の門につきあたり、そこで方向を転じて北に流れ去るのが望見される。湖東寺は、把膝嶺東南三里の平らな耕作地の中にある。寺門は耒水に面している。万暦年間の末年に無懐禅師が建てたもので、後に憨山禅師もやって来てともに棲んでいる。寺域内には静室がある。私が到着したとき、たまたま桂王府の役人が来ていて、斎醮を提供していた。ふたりの宦官により無理矢理に斎醮を挙行させられていたのである。

●南門外の廻雁峯と雁峯寺

そこで西行すること五里で、木子・石子の二小嶺を過ぎる。丁家渡で湘江を渡れば、そこはもう衡城南門の外であった。

崖を登って廻雁峯に上る。峯はそれほど高くはないが、東は湘水に臨み、北に衡州城を見る。いずれも足の下にある。雁峯寺が廻雁峯の上を覆うように立っていて、隙間がないほどである。しかしあちこちが壊れかかっている。僧がいる千手観音殿で中食を取る。

●城内

食事後、北の方へ市街地に下る。泥でぬかるんでおり、脛が没するほどである。一里進み、南門に入る。四牌坊を経由する。城中の市街地と城の東部の河沿いの市場とはどちらも賑わっている。さらに又た一里進み、桂府王城の東を経由する。さらに又た一里で、郡の役所の西に至る。さらに又た一里で、北門を出る。そして北のかた石鼓山に登る。

●北門外の石鼓山

石鼓山は臨蒸駅のうしろ、武侯廟の東に位置する。湘江が南に流れ、蒸江が北を流れる。この山は地脈が二筋の川の間から渡ってきて、ここで東に突出して峯を形成しているもの

である。山の前に禹碑亭がある。大禹の《七十二字碑》がその中にある。その刻文は以前に摹写した〈望日亭碑〉に比べてやや古風である。しかし文字がかすれ、ぼんやりしている。字形についても碑文の内容についてもとても異なるものがある。禹碑亭のうしろは崇業堂である。

石鼓山をさらにのぼると、宣聖殿が中央に対峙している。宣聖殿のうしろには高い楼閣が高く聳えている。下層は廻瀾堂といい、上層は大観楼という。

（その上に登ると）西には延伸する山脊を俯瞰し、衡城には同じ高さの目線で臨み、廻雁峯とは南北で向かい合う。蒸江と湘江とが左右を夾んでいて、まるで窓や欄干の下を流れて近づいてくるかのようである。ただし、東側の二江が合流するところは、楼閣の背後になっていて、全景を目にすることはできない。

しかし、残りの三面は高いところから形勝を取り集めてみわたすことができる。近景では、市中の一万もの家々から立ち上る炊飯の煙で、あたりは烟り、湘江・蒸江・耒江の川面には真っ白な帆牆が青々とした水面に映えている。［湘江は南から、蒸江は西から、耒江は東南から流れてくる。］遠景では、南岳衡山にかかる雲煙や、嶺の上に茂る樹木などが、盛んになって見え隠れし、重なりあっている。

（石鼓書院がある。）書院そのものの規模や大きさは、吉安の白鷺大観に及ばないが、この地はとりもなおさず名賢たちが後輩の教育を楽しんだところであり、滕王閣や黄鶴楼のような景勝を兼ね備えており、［韓愈・朱熹・張栻が学門を講じたところである。］白鷺書院がおよぶべくもないものである。

●生生閣

楼のうしろは七賢祠である。七賢祠のうしろは生生閣である。生生閣は東に向いており、眼下に二江［蒸江と湘江］が合流するのが見え、北に二里のところで耒江が湘江に入るのを俯瞰する。（生生閣は）大観楼と東西向きをかえている。思うに、大観楼は山頂にあって、南北西三面の奇勝を兼ね収めており、この生生閣は東側の湘江と蒸江の二水が合流する景勝を見尽くすのである（大観楼と生生閣とで、東西南北四方の景勝を味わい尽くせる）。

●合江亭と六尺鼓

生生閣からさらに東には合江亭がある。この亭の土台あたりはさらに下の方にあり、川の流れにより近づいている。亭の南の崖の側に、高さ五尺ばかりの穴があいており、合掌しているかのようである。東に向いて開いており、肩を傾けれて入れば、二人入ることができる。これが朱陵洞後門である。いうところの「六尺鼓」を探したが、見つけられなかった。亭の下の、水辺に瀕したところに豎婢のような石がふたつあった。これが乱に遭遇したらそのたびに鳴るといわれているものであろうか。

●緑竹菴に帰る

大観楼に登ったころから、夕陽に向き合っていたが、黒雲が太陽を次第に覆い始めていた。再び雨が降ってくる兆しであろう。

楼を下り、ぬかるみを踏んで、暗くなってきた中をおして青草橋を過ぎる。東北に二里進み緑竹菴に入った。

晩餐を終えるころには、台風のような強い風が怒号を叫んでいた。この風は、明け方になってようやく止んだ。しかし雨はまだ瀟瀟として激しく降っている。

〈その二〉

《概要》衡州府域の全体的な概観と風水的な観点からの考察。

■本文の部

衡州城東面瀕湘、通四門、餘北西南三面鼎峙、而北爲蒸水所夾。其城甚狹、蓋南舒而北削云。北城外、則青草橋跨蒸水上、[此橋又謂之韓橋、謂昌黎公過而始建者。然文獻無徵、今人但有草橋之稱而已。]而石鼓山界其間焉。蓋城之南、廻雁當其上、瀉城之北、石鼓砥其下流、而瀟・湘循其東面、自城南抵城北、於是一合蒸、始東轉西南來、再合耒焉。

蒸水者、由湘之西岸入、其發源於邵陽縣耶薑山、東北流經衡陽北界、會唐夫・衡西三洞諸水、又東流抵望日坳爲黄沙灣、出青草橋而合於石鼓東。一名草江、[以青草橋故。]一名沙江、[以黄沙灣故。]謂之蒸者、以水氣如蒸也。舟由青草橋入、百里而達水福、又八十里而抵長樂。

耒水者、由湘之東岸入、其源發於郴州之耒山、西北流經永興・耒陽界。又有郴江、發源於郴之黄岑山、白豹水發源於永興之白豹山、資興水發源於鈷鉧泉、俱與耒水會。又西抵湖東寺、至耒口而合於廻雁塔之南。舟向郴州・宜章者、俱由此入、過嶺、下武水、入廣之湞江。

來雁塔者、衡州下流第二重水口山也。石鼓從州城東北特起垂江、爲第一重；雁塔又峙於蒸水之東・耒水之北、爲第二重。其來脈自岣嶁轉大海嶺、度青山坳、下望日坳、東南爲桃花冲、[即緑竹・華嚴諸庵所附麗高下者。]又南瀕江、即爲雁塔、與石鼓夾峙蒸江之左右焉。

衡州之脈、南自廻雁峯而北盡於石鼓、蓋邵陽・常寧之間迤邐而來、東南界於湘、西北界於蒸、南嶽岣嶁諸峯、乃其下流迴環之脈、非同條共貫者。徐靈期謂南嶽周廻八百里、廻雁爲首、嶽麓爲足、遂以廻雁爲七十二峯之一、是蓋未經孟公坳、不知衡山之起於雙髻也。若嶽麓諸峯磅礴處、其支委固遠矣。

■訳注の部

●訓訳

衡州城の東面は湘に瀕す。四門を通じ、餘の北西南の三面は鼎峙す。而して北は蒸水の夾む所となる。其の城は甚だ狹し。蓋し南は舒して北は削すと云ふ。北の城外は、則ち青草橋蒸水の上に跨がる。[此の橋は又た之を韓橋と謂ふ。昌黎公過ぎりて始めて建つる者と謂ふ。然れども文獻に徵無く、今人に但だ草橋の稱有るのみ。]而して石鼓山其の間を界す。蓋し城の南は、廻雁其の上に當り、城の北へ瀉し、石鼓其の下流を砥す、而して瀟・湘其の東面に循ひ、城南より城北に抵る。是において一に蒸を合し、始めて東に轉じて、西南より來りて、再び耒を合す。

蒸水は、湘の西岸より入る。其の源は邵陽縣耶薑山に發す。東北に流れて衡陽の北界を經て、唐夫・衡西三洞の諸水を會し、又た東に流れて望日坳に抵りて黄沙灣となり、青草橋に出でて石鼓の東に合す。一名草江、[青草橋を以ての故なり。]一名沙江。[黄沙灣を以て之故なり。]之を蒸と謂ふは、水氣の蒸するが如きを以てなり。舟は青草橋より入り、百里にして水福に達し、又た八十里にして長樂に抵る。

耒水は、湘の東岸より入る。其の源は郴州の耒山に發す。西北に流れて永興・耒陽の界

を經る。又た郴江有り。源を郴の黄岑山に發す。白豹水は、源を永興の白豹山に發す。資興水は、源を鈷鉧泉に發す。俱に耒水と會す。又た西して湖東寺に抵り、耒口に至りて廻雁塔の南に合す。舟の郴州・宜章に向かふ者は、俱に此より入り、嶺を過ぎ、武水に下りて、廣の湞江に入る。

來雁塔は、衡州の下流の第二重水口の山なり。石鼓は州城の東北より特起して江に垂るるの、第一重たり。雁塔は又た蒸水の東・耒水の北に峙し、第二重となる。其の來脈は岣嶁よりして大海嶺に轉じ、青山坳を度り、望日坳に下り、東南して桃花冲となり、[即ち緑竹・華嚴諸庵の高下に附麗する所の者なり。]又た南は江に瀕し、即ち雁塔となり、石鼓と蒸江の左右を夾峙す。

衡州の脈は、南は廻雁峯よりして北に石鼓に盡く。蓋し邵陽・常寧の間、迤邐として來る。東南は湘に界され、西北は蒸に界さる。南嶽岣嶁の諸峯は、乃ち其の下流迴環の脈にして、同條共貫する者に非ざるなり。徐靈期謂ふ「南嶽は周廻八百里、廻雁を首となし、嶽麓を足となす」と。遂に廻雁を以て七十二峯の一となす。是れ蓋し、未だ孟公坳を經ずして、衡山の雙髻に起こるを知らざるなり。嶽麓の諸峯の磅礴たる處の若きは、其の支委は固より遠し。

●語注

○四門　衡陽城は南北に長く延び、東西の幅は狭い城域である。門の名前を、遊記と「衡陽県志」付図とで対照させて記す。北に延びた嘴の先端に「瞻岳門（北門）」があり、湘江に瀕する東側に、北から「瀟湘門」、「柴埠門（遊記）・賓日門（県志）」、「鉄楼門（遊記）・閲江門（県志）」の三門が並ぶ。南は「回雁門（南門）」があり、西は北から「小西門（遊記）・望湖門（県志）」、「西門（遊記）・安西門（県志）」の二門である。遊記がここで東面四門というのは湘水に面した三門に瞻岳門を加えたものではないか。

○其間　黄珅は北城と蒸江の間、任国瑞は北城と青草橋の間、と解する。しかし、おそらくここは湘江について述べている部分だと思われるので、蒸江と湘江との間、と解した。また以下の文章も湘江について述べていると解した。

○砥　「みがく」の意味だが、ここは黄河の激流にそそり立つ砥柱に掛けているものと解

○瀟湘　瀟湘八景で有名な、瀟江と湘江だが、ここでは湘江を言うと解した。

○蒸水　「大明一統志」巻六四衡州城山川に「〔蒸水〕在府城北。水氣加蒸者。源出寶慶府邵陽縣耶薑山。東北流至衡陽縣界、會清陽水、又東流經府城北、會于湘。」とある。

○耒水　「大明一統志」巻六四衡州城山川に「〔耒水〕在府城北。源出郴州之耒山。西北流經耒陽衡陽縣界、至耒口、注于湘。」とある。

○郴州　明代は湖広布政司の州。府治は郴州附郭で、今の郴州市。湖広の東南端にあり、広東と隣接する。このあたりは、楚の南を経巡った後に徐霞客は訪ねている。

○耒山　「大明一統志」巻六六郴州山川に「〔耒山〕在桂陽縣南五里。四面孤絶。耒水之所出。」とある。

○永興　明代は郴州の県。今の永興県。

○耒陽　明代は衡州府の県。今の耒陽県。

○郴江　「大明一統志」巻六六郴州山川に「〔郴水〕在州城東。一名郴江。源發黄岑山、北流至此。」とある。

○黄岑山　「大明一統志」巻六六郴州山川に「〔黄岑山〕在州城南三十六里。郴水所出。……即五嶺之一。」とある。騎田嶺ともいう。
○白豹水　「大明一統志」巻六六郴州山川に「〔白豹水〕在永興縣西。源出白豹山。流至森口入郴水。」とある。黄珅は、「豹水生花」が永興八景の一だという。
○白豹山　「大明一統志」巻六六郴州山川に「〔白豹山〕在永興縣西九十里。白豹水源出此山。」とある。
○資興水　「大明一統志」巻六六郴州山川に「〔資興水〕在興寧縣東南六十里。源出古鉧泉。……至濾渡合耒水。」とある。
○鉧鉧泉　「大明一統志」巻六六郴州山川に「〔古鉧泉〕在州城東百餘里。山下有一泉。」とある。
○宜章　明代は郴州の県。今の宜章県。
○武水　「大明一統志」巻七九韶州山川に「〔武水〕在府城東。源出郴州臨武崗、經宜章縣、南流入樂昌縣、又南流至此合湞水。」とある。
○湞江　「大明一統志」巻七九韶州山川に「〔湞水〕在府城東。源出大庾嶺、經保昌縣、南流合武水、爲曲江。」とある。曲江は北江ともいい、南流して海に入る。
○來雁塔　譚民政は、万暦九（一五八一）年の創建とし、訪ねている（P127～128）。
○水口　堪輿家の言だとすると「穴ないし明堂から水が流れ出ていく出口のところを「水口」という」「この水口周辺にある山が「水口砂」である。水口の砂はもっとも利害にかかわる」と言われる」「また、水口周辺にある樹木や人工建造物、すなわち橋や寺院・祠廟なども禍福とかかわりがある」「「華表」というのは、宮殿や陵墓の前に建てられた飾りつきの石柱のことであるが、風水では水口の周辺に卓立した奇峰や対峙する二つの高山をいう」（三浦國雄『風水講義』）などとある。風水についての理解が及んでいないが、遊記のこの部分は、衡陽周辺の風水について述べているのは間違いない。
○大海嶺　このあたりの地脈の記述は、正月二十八日条で記述していた。同じ条であり、で通貫している脈ということだろう。
○常寧　明代は衡州の県。今の常寧県。
○同條共貫　朱恵栄は「共同貫通的一条」、黄珅は「属同一條山脈」と訳す。
○徐靈期　宋陳田夫『南嶽総勝集』に「衡嶽觀……晉太康八年、呉人徐靈期新野先生鄧郁之開」とあり、「上清宮……呉人徐靈期真人修行之所……採訪山洞巖谷作衡岳記。」とある。三国呉の道士で、南嶽衡山に遊び修行をしたこと、「衡岳記」もしくは「南嶽記」という山岳地志を書いたことが分かる。徐靈期の「南嶽記」は散逸しているが、輯本があり、「麓山精舎輯本」では「輿地紀勝」からの引用として、「南嶽周廻八百里、廻雁爲首、嶽麓爲足」を引く。「大明一統志」巻六四「回雁峯」の項に、同文を引用する。
○磅礴　盛大なさま、充実したさま。

●口語訳

《2》衡州城の地誌

●衡州城の概要

衡州城の東面は湘江に面している。四門は通じており、残りの北西南の三面は鼎の足のように鼎立している。そして北面は蒸水に夾まれている。衡州城はとても狭い。（地勢と

して）南へは伸びるが北は削がれている（伸びることができない）からだと思われる（蒸江が北を流れているのでそこでせき止められて北へ街が伸びることができないことをいうか）。北の城外では、青草橋が蒸江の上に跨がっている［この橋はまた韓橋とも呼ばれている。韓愈がここを訪れたときに始めて建設したものであるという。しかし、文獻にはそのことは記されておらず、今の人たちには、ただ草橋という呼称のみが伝わっている。］。

●衡州城を囲む河川

そして石鼓山が湘江と蒸江とを隔てている。思うに（湘江について述べれば）、城の南では、廻雁峯がその上流にあたり、城を北へ洗って行き、石鼓山がその下流に屹立している。そして湘江が衡州城の東面に沿って、城南から城北に至っているのだが、石鼓山において先ず蒸江と合流し、ここで東に転じて、西南から東北へ流れて、次には耒江と合流する。

●蒸水

蒸水は、湘江の西岸から合流している。その源は邵陽縣耶薑山に発する。東北に流れて衡陽県の北部を経て、唐夫・衡西三洞の諸水と合流し、また東に流れて望日坳に至って黄沙灣となり、青草橋に出て、石鼓山の東で湘江と合流する。一名を草江といい［青草橋にちなむ名。］、また沙江と言う［黄沙湾にちなむ名。］。蒸と言うのは、川面からもやが蒸気のように立ち上るからである。舟で青草橋から入り、百里で水福に達し、さらに又た八十里で長楽に至る。

●耒水

耒水は、湘江の東岸から合流している。その源は郴州の耒山に発する。西北に流れて永興・耒陽県の境域を経由する。さらに又た郴江がある。源を郴州の黄岑山に発する。白豹水は、源を永興県の白豹山に発する。資興水は、源を鈷鉧泉に発する。いずれも耒水と合流する。耒水は、さらに又た西に進んで湖東寺に至り、耒口に至って廻雁塔の南で湘江に合流する。郴州・宜章に向かう船は、いずれもここから北流する耒水に入り、（遡っていき、分水嶺をなす）五嶺のひとつである南嶺を通り過ぎ、南流する武水を下って、廣州の湞江に入る。

《3》衡陽付近の地脈

来雁塔は、衡州から下へ流れた第二重の水口の山にある。石鼓山は州城の東北に特起して湘江に垂れている、第一重である。一方来雁塔は、蒸水の東、耒水の北に対峙している点で、第二重である。

この来脈は岣嶁峯から発し、大海嶺で転じて、青山坳を渡って、望日坳に下り、東南に下って桃花冲となる［ここが緑竹・華厳の諸庵が、あるいは高くあるいは低く庵を構えているところである。］。さらに又た南は湘江に面し、ただちに来雁塔となり、石鼓山とともに、蒸江を左右から差し挟む。

（一方）衡州城を通る地脈は、南の廻雁峯より起こり北の石鼓山で尽きている。思うに、この地脈は、邵陽県と常寧県との間を、くねくねと曲がりながらやってくるのだ。東南を湘江にはばまれ、西北は蒸江にはばまれる。南嶽岣嶁の諸峯は、この地脈の下流でわだかまっているものであり、同一で通貫している脈ではない。

徐霊期は「南嶽は周廻八百里、廻雁を首とし、嶽麓を足とする」と言い、そこから廻雁峯は南嶽七十二峯の一とみなされてしまった。この衡州城の地脈は孟公坳を経由していな

いものであり、衡山の地脈が、双髻峯から起こっていることが分かっていないのである。嶽麓の諸峯が盛んに充実していることから見れば、衡州城の地脈は、遠くから延びてきていることが分かる。

［二月二日から六日］

《概要》衡陽滞在。天気が悪く、足場も悪いため、外出を控え、詩文を作ったりして過ごす。

■本文の部

初二日

早起、欲入城、並遊城南花藥山。雨勢不止、遂返天母菴。菴在修竹中、有喬松一株當戸、其外層崗廻繞、竹樹森鬱、俱在窗檻之下、前池浸緑、仰色垂痕、後坂幃紅、桃花吐豔。［原名桃花冲。］風雨中春光忽逗、而泥屐未周、不能無開雲之望。下午、滂沱彌甚、乃擁爐瀹茗、兀坐竟日。

初三日

寒甚、而地濘天陰、顧僕病作、仍擁爐菴中、作《上封寺募文》。中夜風聲復作、達旦仍（未）止雨*1。

初四日

雨、擁爐菴中、作完初上人《白石山精舍引》。

初五日

峭寒、釀雨。令顧僕往河街。［城東瀕湘之街、市肆所集。］覓永州船、余擁爐書《上封疏》・《精舍引》、作《書懷詩》呈瑞光。

初六日

雨止、濘甚。入城拜郷人金祥甫、因出河街。抵暮返、雨復霏霏。［金乃江城金斗垣子、隨桂府分封至此。其弟以荊溪壺開肆東華門牆下。］

●校勘

＊1　もと「仍止雨」。上海整理本では、意を持って「未」を補っているものと思われる。訳注では「未止雨」で訳す。

■訳注の部

●訓訳

初二日

早に起く。城に入り、並びに城南の花藥山に遊ばんと欲す。雨勢止まず、遂に天母菴に

返る。

菴は修竹の中に在りて、喬松一株戸に當る有り。其外は層崗廻繞し、竹樹森鬱として、俱に窗檻の下に在り。前の池は緑を浸し、仰色痕を垂る。後の坂は幃紅、桃花豔を吐く。［原の名は桃花冲なり。］風雨の中に春光忽として逗（とお）る、而して泥屐にては未だ周ねからず、雲を開くの望み無きこと能わず。下午、滂沱彌々甚し。乃ち爐を擁して茗を瀹（に）、兀坐して日を竟ふ。

初三日

寒きこと甚し。而して地は濘にして天は陰なり。顧僕病作る。仍りて爐を菴中に擁し、《上封寺募文》を作る。中夜に風聲復た作る、旦に達するも仍（な）ほいまだ止雨せず。

初四日

雨ふる。爐を菴中に擁し、《完初上人白石山精舎の引》を作る。

初五日

峭寒にして、釀雨なり。顧僕をして河街［城東の湘に瀕するの街にして、市肆の集まる所なり。］に往き、永州の船を覓めしむ。余は爐を擁して《上封疏》・《精舎引》を書し、《書懐詩》を作りて瑞光に呈す。

初六日

雨止む、濘甚し。城に入り郷人の金祥甫を拜す。因りて河街に出で、暮に抵りて返る。雨復た霏霏たり。［金は乃ち江城の金斗垣の子なり。桂府の分封するに隨ひて此に至る。其の弟は荊溪壺を以て肆を東華門牆下に開く。］

●語注

○花藥山　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「〔花藥山〕在府治西南。俗傳、昔神仙煉丹。有五色禽嘗棲于牡丹樹、因名。」とあり、「清泉県志」巻一地理山に「〔花藥山〕縣西南二里。山巔有擷翠亭、即唐采訪使韋虚舟所建、望嶽亭故址」とある。

○窗檻　熟語はないが、窓の格子だろう。

○幃紅　幃はとばり、カーテン。とりあえず「紅のとばり」と訳した。

○桃花冲　冲は「山区（山がちのところ）里的平地」（『漢語大詞典』）。

○逗　光や空気などがとおる。

○兀坐　意識を忘れ去って、ぼんやりと座る。

○上封寺募文　伝わらず。未詳。

○完初上人白石山精舎引　伝わらず。未詳。底本は「完初上人《白石山精舎引》」と表記するが、これでは「完初上人作の《白石山精舎引》」となってしまう。作者は徐霞客であるので、引（歌）の名称は《完初上人白石山精舎引》とすべきであろう。

○完初　不詳だが、緑竹菴の僧侶であろう。

○峭寒　肌を刺すようなさま。

○釀雨　用例がない。釀雪は、空気中の水蒸気がだんだんと雪になってゆく、またその雪。

雪交じりの雨、また雨交じりの雪、即みぞれのことか。
○永州　府で、府治は零陵。衡陽から西南に湘江を遡る。
○金祥甫　不詳。徐霞客の同郷の人。こののち、遭難後に世話になり、衡陽を再出発するときの資金調達にも協力してもらう。
○金斗垣　不詳。金祥甫の父親。
○荊溪壺　荊溪は、江蘇省宜興県城にある川。この地は紫砂の陶器の壺の名産地。「荊溪恵孟臣製」と銘打たれた中国茶用の小急須が特に有名である。

●口語訳

《4》衡陽滞在。雨のため無為に過ごす。

［二日］

早朝に起きる。

衡陽州城に入り、さらに城南の花薬山に遊ぼうと思った。しかし、雨勢が止まず、結局天母菴に引き返した。

天母菴は丈の長い竹藪の中にあって、門戸に背の高い松の木が一株ある。庵の外には幾重もの崗がめぐりつつんでおり、翠の竹や青い樹木が鬱蒼と茂っており、それらすべてが庵の窓の格子から近くに見えている。

庵の前の池は緑色に染まっており、仰ぎ見る緑色の竹木が、池の水面に逆さまに影を落としている。庵うしろの坂は紅のとばりがかけられているようで、桃花が競うように赤く咲き誇っている［この地の元々の名は桃花冲という。］。春の光線が風雨の中に忽然と差し込んできた。どろにまみれた私の靴ではとてもあたりを歩き回ることはできず（あたりがぬかるんでいて歩けないことを言っているのか）、雲が晴れることを強く望んだ。

しかし、午後になると、滂沱たる雨脚はいよいよ激しくなってきた。そこでやむを得ず、火爐にあたってお茶を沸かし、終日ぼんやりとして過ごした。

［三日］

とても寒い。しかも地面はぬかるんでいて空も曇っている。顧僕が病気になった。そこで菴の中で火爐にあたり、《上封寺募文》を作った。夜中に風の音が再び起こる。朝になっても、風雨は止まない。

［四日］

雨降りである。菴中で火爐にあたり、《完初上人白石山精舍の引》を作った。

［五日］

肌を刺すような寒さで、雪交じりの雨が降っている。顧僕に河街［城東の湘江に面した街で、市場商店が集まっているところである。］に行って、永州行きの船便の手配をさせる。私は火爐にあたって、《上封疏》と《精舍引》を清書し、《書懐詩》を作って瑞光に進呈した。

［六日］

雨止むも、地面のぬかるみは甚しい。衡州城に入り郷人の金祥甫に挨拶に行く。そのまま河街に出て、暮になって菴に返る。雨が復た霏霏として降ってきた［金祥甫は江陰の金斗垣の息子である。桂王が封地の衡州に移るのに従ってきて、ここへ来たのである。彼の弟は東華門の牆の下で荊溪壺を扱う店を開いている。］。

［二月七日］

《概要》この日は天気がよく、府城の北の、桂花園や桃花源を散策。停雲亭に上り、四周を見渡し、曲がりくねる湘江や南嶽などを遠望した。この間ずっと雨と寒さに閉じ込められていたので、久しぶりに外での散策と遠望を楽しんだ。

■本文の部

初七日

上午開霽。靜聞同顧僕復往河街更定永州舡。余先循菴東入桂花園。［乃桂府新構〔慶桂堂地〕爲賞桂之所。］〔前列丹桂三株、皆聳幹參天、接蔭蔽日。其北寶珠茶五株、雖不及桂之高大、亦鬱森殊匹。〕又東爲桃花源。〔西自華嚴・天母二菴來、南北俱高崗夾峙、中層疊爲池、池兩旁依崗分塢、皆梵宮紺宇、諸藩閹亭榭、錯出其間。〕桃花源之上即桃花冲、乃嶺坳也。其南之最高處新結兩亭、一曰停雲、又曰望江、一曰望湖、在無憂菴後修竹間。時登眺已久、乃還飯緑竹菴。復與完初再上停雲、從其北逾桃花冲坳、其東崗夾成池、越池而上、即來雁塔矣。塔前爲雙練堂、西對石鼓、返眺蒸・湘交會、亦甚勝也。塔之南、下臨湘江、有巨樓可憑眺、惜已傾圮。樓之東即爲耒江北入之口、時日光已晶朗、岳雲江樹、盡獻眞形。乃趣完初覓守塔僧、開扃而登塔、歷五層。四眺諸峯、北惟衡岳最高、其次則西之雨母山、又次則西北之大海嶺、其餘皆崗隴高下、無甚崢嶸、而東南二方、固豁然無際矣。〔湘水自廻雁北注城東、至石鼓合蒸、遂東轉、經塔下。東合耒水北去、三水曲折、不及長江一望無盡、而紆廻殊足戀也。〕眺望久之、恐靜聞覓舟已還、遂歸詢之、則舟之行尚在二日後也。是日頗見日影山光、入更復雨。

按雨母山在府城西一百里、乃廻雁與衡城來脈、茲望之若四五十里外者、豈非雨母、乃伊山耶？恐伊山又無此峻耳。［志曰「伊山在府西三十五里、乃桓伊讀書處。」而雨母則大舜巡狩所經、亦云雲阜。余苦久雨、望之不勝曲水之想。］

■訳注の部

●訓訳

初七日

上午、開霽す。

靜聞顧僕と同に復た河街に往き、更めて永州の舡（ふね）を定む。余は先に菴の東に循ひて桂花園に入る。［乃ち桂府新たに慶桂堂を構ふるの地なり。桂を賞するの所を為すなり。］前列の丹桂三株は、皆な聳ゆる幹が天に參（まじ）はり、蔭を接して日を蔽ふ。其の北の寶珠茶五株は、桂の高大には及ばずと雖も、亦た鬱森として匹に殊なる。

又た東は桃花源たり。西のかた華嚴・天母の二菴より來り、南北に倶に高崗夾峙し、中は層疊として池を爲す。池の兩旁は崗に依りて塢を分かつ。皆な梵宮紺宇ありて、諸々の藩閹の亭榭、其に間に出づ。桃花源の上は即ち桃花冲にして、乃ち嶺の坳なり。其の南の最高の處に新たに兩亭を結ぶ、一は停雲と曰ひ、又た望江と曰ふ。一は望湖と曰ふ。無憂菴の後の修竹の間に在り。時に登りて眺すること已に久しくす。乃ち還りて緑竹菴に飯す。復た完初と再び停雲に上る。其の北より桃花冲の坳を逾ゆれば、其の東の崗は池を夾成す、

池を越えて上れば、即ち來雁塔なり。塔の前は雙練堂たり。西は石鼓に對す。返って蒸・湘の交會を眺む。亦た甚だ勝なり。塔の南、下って湘江に臨むに、巨樓の憑眺すべき有るも、惜しむらくは已に傾圮せり。樓の東は即ち耒江北に入るの口たり。時に日光已に晶朗として、岳雲江樹、盡く眞形を獻(あらは)す。乃ち完初を趣(うなが)して塔を守るの僧を覓め、扃(かんぬき)を開きて塔に登り、五層を歴す。諸峯を四眺するに、北に惟だ衡岳最も高く、其の次は則ち西の雨母山なり、又た次は則ち西北の大海嶺なり。其の餘は皆な崗隴高下にして、甚しく崢嶸なるは無し。而して東南の二方は、固より豁然として際無し。湘水は廻雁より北して城東に注ぎ、石鼓に至りて蒸に合す。遂に東に轉じて、塔の下を經、東して耒水を合して北に去る。三水は曲折して、長江の一望にして盡くる無きには及ばざるも、而も紆迴は殊に戀ふるに足るなり。眺望すること之を久しくす。靜聞の舟を覓めて已に還らんことを恐る。遂に歸りて之を詢へば、則ち舟の行くは尚ほ二日の後に在るなり。是の日頗る日影山光を見る、更に入れば復た雨ふる。

　按ずるに雨母山は府城の西一百里に在り。乃ち廻雁と衡城とより來る脈にして、茲に之を望むに四五十里の外の者の若し。、豈に雨母に非ずや。乃ち伊山か。恐るらくは伊山は又た此の峻無きのみ。[志に曰く「伊山は府の西三十五里に在り、乃ち桓伊書を讀むの處なり」と。而して雨母は則ち大舜巡狩して經る所なり、亦た雲阜と云ふ。余久しき雨に苦しみ、之を望むに曲水の想に勝へず。]

●語注

○開霽　雨後、空が晴れ渡る。

○丹桂　黄珅は、桂樹の一種とし、《本草綱目》により、巖桂は俗に木犀といい、花が白いものを銀桂、黄色いものを金桂、赤いものを丹桂という、と注する。

○寶珠茶　花の名。山茶の一種。宝珠、宝珠山茶ともいう。

○層疊爲池　この文意味が通らない。なにが「層疊」すれば「爲池」となるのか。

○梵宮紺宇　どちらも仏教寺院。

○亭榭　亭閣台榭。物見を主な目的とする高い建築物。

○雨母山　「大明一統志」巻六四衡州府山川に「[雨母山]在府城西一百里。亦名雲阜山。上有石壇。」とあり、「清泉県志」もほぼ同じ。

○更　夜の時間を区切る単位。夜の意に解した。

○志　「大明一統志」。該当箇所は、巻六四衡州府山川。

●口語訳

[七日]

《5》桃花冲散策。

午前中に雨が上がる。

静聞は顧僕と一緒に、再び河街に行って、改めて永州往きの船便を確保することになった。私は（緑竹菴のある桃花冲を探索することにした。）

●桂花園

先ず緑竹菴の東側に沿って行き、桂花園[ここは桂王府が新たに慶桂堂を構築したところであり、桂を鑑賞する場所として作られたものである]に入る。園の前に並ぶ三株の丹桂は、いずれ

も幹が高く聳えて天に交わらんばかりであり、枝葉が重なって蔭をなし、太陽の光を遮っている。その北にある五株の宝珠茶の木は、丹桂の高大さには及ばないが、これも亦た鬱蒼と茂っていて比類ないもの。

●桃花源

桂花園の東は桃花源である。西のかた華厳・天母の二菴から（脈が）来て、ここで南と北に分かれて高い山となって対峙し、その中間は重なりあって池を形成する。池の両側は、山崗によって山塢が分割されている。山塢の中には仏教寺院が建ち並び、藩王府や宦官の亭台がその間に分布している。桃花源の上がとりもなおさず桃花冲で、ここは山嶺の中の坳（窪地）である。その桃花源の南の最も高い場所に、新しい二つの亭台が設けられている。ひとつは停雲亭といい、また望江亭とも呼ばれる。ふたつめは望湖亭という。これらは、無憂菴のうしろの長い竹藪の中にある。その時、亭に登って長い時間眺望を楽しんだ。そののち緑竹菴に還って中食を取った。

●停雲亭よりの眺望

食後、再び完初上人とともに停雲亭に上った。

（眺望を述べると）ここから北へ桃花冲の坳を越えると、その東の方の崗が分かれて池を挟み込む。池を越えてさらに遡ると来雁塔である。塔の前には双練堂があり、西に石鼓山と向かい合っている。

振り返って蒸江と湘江とが交わるところを眺める。これもまたとても素晴らしい景勝である。来雁塔の南には、やや下って湘江に臨むところに、登って眺望を楽しめる巨大な楼閣があるが、残念なことに已に傾き壊れている。その楼閣の東は、すぐに耒江が北へ流れて湘江に入る口にあたる。

時に陽光は明るく輝き、山岳とそこにかかる雲、江水とそのほとりに茂る樹木などが、ことごとくその真の姿を表している。そこで完初上人に催促して塔の管理人の僧侶を捜させて、外から開くかんぬきを開けてもらって塔に入り、五層を登って最上層に至った。そこから四面に諸峯を眺望するに、北には惟だ衡岳が最も高く聳え、その次は西の方の雨母山で、さらにその次は西北方の大海嶺である。その他は、だいたい高低のある丘陵で、とても高く険しいというものなない。そして東方と南方の二方は、からりと開けていて果てしなく広がっている。湘水が廻雁峯から北に流れて衡陽州城の東側を洗い、石鼓山に至りて蒸江を引き受け合流する。ここで東に転じて、来雁塔の下を経て、東に流れて耒水を引き受けて合流して北に流れ去っていく。この三つの川は曲折しており、長江が一望で果てしないところまで見渡せるのには（雄大な眺望という点では）及ばないが、曲がりくねったその様は、特に心引かれて見とれるのに足るものがある。しばらくの間、眺望を楽しんだ。

●菴に帰る

ふと、静聞が船を予約して既に戻っているのではないか、と気になってきた。そこでそのまま菴に帰った。（静聞が帰っていたので）聞いてみると、船の出発はさらに二日後ということだった。

この日は、一日晴れで、陽光や光をあびて明るく輝く山々を見た。しかし夜になるとまた雨が降ってきた。

●雨母山

思うに、雨母山は府城の西一百里にある。廻雁峯と衡州城とから伸びる山脈上にあるのだが、いまここで眺めてみると四五十里しか離れていないように見える。見えているのは雨母山ではないのかもしれない。あるいは伊山か。しかし伊山はこのような険峻さはないように思える[大明一統志に「伊山は衡州府の西三十五里にある。ここはかつて桓伊が書を読んだところである」とある。また雨母山は大舜が巡狩して経由したところである。雲阜山とも言う（「志」には「[伊山]……亦名雲阜山。……湘水記、舜南遊經此。」とある）私は長く雨に苦しめられてきて、今ここで雨母山を望んでいるうちに、曲水の宴をする楽しみが想起されてやまなかった]。

[二月八日]

《概要》この日も、衡陽城周辺散策。桂王府では一対の石の獅子を見て考察し、花薬山では巨大な伽藍を持つ報恩寺を訪ね、寺宝である「宋徽宗弟表文」について、寺僧のねつ造ではないかと疑っている。自然観察ではないが、寺宝について書かれた文書のでたらめさを指摘して、偽物ではないか、とするところなどは、冷静な観察者としての徐霞客の姿勢が伺える。

■本文の部

初八日

晨起雨歇、抵午有日光、遂入城、經桂府前。府在城之中、圓瓦城半、朱垣碧瓦、新麗殊甚。前坊標曰「夾輔親潢」、正門曰「端禮」。前峙二獅、其色純白、云來自耒河内百里。其地初無此石、建府時忽開得二石筍、俱高丈五、瑩白如一、遂以爲獅云。仍出南門、一里、由廻雁之麓又西一里、入花藥山。山不甚高、即廻雁之西轉廻環而下府城者。諸峯如展翅舒翼、四拱成塢、寺當其中、若在圍城之内、弘敞爲一方之冠。蓋城北之桃花冲、俱靜室星聯、而城南之花藥山、則叢林獨峙者也。寺名報恩光孝禪寺。寺後懸級直上、山頂爲紫雲宮、則道院也。其地高聳、可以四眺。還寺、遇錫僧覺空、[興道人。]其來後余、而先至此。因少憩方丈、觀宋徽宗弟表文。其弟法名瓊俊、棄玉牒而遊雲水。時知府盧景魁之子移酌入寺、爲瓊俊所辱、盧收之獄中、潛書此表、令獄卒王祐入奏、徽宗爲之斬景魁而官王祐。其表文與徽宗之御札如此、寺僧以爲宗門一盛事。然表中稱衡州爲邢州、御札斬景魁、即改邢爲衡、且以王祐爲衡守。其説甚俚、恐寺中捏造而成、非當時之實跡也。出寺、由城西過大西門・小西門、城外俱巨塘環饒、闤闠連絡。共七里、東北過草橋、又二里、入緑竹菴、已薄暮矣。是日雨已霽、迨中夜、雨聲復作潺潺、達旦而不止。

■訳注の部

●訓訳

初八日

晨に起く。雨歇む。午に抵りて日光有り。

遂に城に入り、桂府の前を經る。府は城の中に在りて、圓にして城の半ばを瓦（わた）る。朱垣碧瓦、新麗なること殊に甚し。前の坊標に曰く「夾輔親潢」と。正門に曰く「端禮」と。

前に二獅峙す。其の色は純白なり。耒河の内百里より來ると云ふ。其の地初めは此の石

無し。府を建つるの時忽として開きて二石筍を得。俱に高さ丈五にして、瑩白如一なり。以て獅を爲ると云ふ。

仍りて南門を出づ。一里にして、廻雁の麓により又た西に一里にして、花藥山に入る。山は甚だしくは高からず。即ち廻雁の西に轉じて廻環して府城に下る者なり。諸峯は展翅舒翼の如く、四拱して塢を成す。寺其の中に當り、圍城の内に在るが若し、弘敞にして一方の冠たるなり。蓋し城北の桃花冲は、俱に靜室星聯たりて、而して城南の花藥山は、則ち叢林獨峙する者なり。寺の名は報恩光孝禪寺なり。寺の後ろ級を懸けて直ちに上る。山頂は紫雲宮たり、則ち道院なり。其の地は高聳にして、以て四眺すべし。

寺に還り、錫僧覺空に遇ふ「興道の人なり。」。其の來るは余に後れ、而して先に此に至るなり。因りて少しく方丈に息ふ。宋徽宗の弟の表文を觀る。其の弟は法名瓊俊、玉牒を棄てて雲水に遊ぶ。時に知府盧景魁の子酌を移して寺に入り、瓊俊の辱むる所と為る。盧之を獄中に収む。潛に此の表を書し、獄卒王祐をして入りて奏せしむ。徽宗之が爲めに景魁を斬りて王祐を官とす。其の表文と徽宗の御札と此の如し。寺僧以って宗門の一盛事と為す。然れども表中衡州を稱して邢州となし、御札の景魁を斬るには、即ち邢を改めて衡と為し、且つ王祐を以て衡の守と為す。其の説甚だ俚なり。恐らくは寺中にて捏造して成るにして、當時の實跡に非ざるなり。

寺を出で、城の西によりて大西門・小西門を過ぐ。城外は俱に巨塘環饒し、闤闠連絡す。共に七里にして、東北に草橋を過ぐ。又た二里にして、緑竹菴に入る。已に薄暮なり。是の日雨已に霽れ、中夜に迨(およ)びて、雨聲復た潺潺を作し、旦に達しても止まず。

●語注

○晨　清晨。早朝。

○桂府　譚民政によれば、衡州に王府が作られたのは、成化二一（一四八七）年の雍王府に始まる。正徳二（一五〇七）年に、衡陽で地震が起こり、王府も損壊してしまい、雍王も死去した。その後、天啓七（一六二七）年に朱常瀛が桂王として衡州に赴任し、王府を再建する。ところが崇禎二（一六二九）年に、大雨と落雷で府の寝殿が被害を受けたくさんの宮女が犠牲となった。翌年から再建が始まり、同九（一六三六）年に竣工した、という。徐霞客が訪ねたのはその翌年で、再建された直後であった。

○夾輔親潢　夾輔は補佐。潢を黄珅は、天潢、すなわち星の名、転じて皇族と解す。親潢でも皇族の意。「皇帝を補佐する皇族」くらいの意味か。

○端禮　「端正・礼儀」くらいの意味か。

○丈五　一丈五尺。明尺なら、五(メートル)弱。

○瑩　玉のつや、光沢。

○如一　一律、一様。

○弘敞　高大寛敞。高く大きくて広い。

○報恩光孝禪寺　「大明一統志」巻六四衡州府寺観に「〔報恩寺〕在花藥山。宋建、本朝重脩」とあり、「清泉県志」巻四祠祀寺に「〔花樂寺〕縣西南花樂山、即光孝報恩寺。宋寶祐五年（一二五七）建。」とある。

○興道　黄珅は、古い県の名で、今の広西横県の東南百里ばかりにあたる、と注す。

○玉牒　皇帝の族譜。皇室の見内の身分にあることをいう。

○遊雲水　雲と水に遊ぶ、自然に遊ぶ。雲水は、行雲流水。流れゆきてやまない雲水のように一カ所に留まらず淡々と巡り歩く行脚僧。

●口語訳

［八日］

《6》城内探索

早朝に起きる。雨は止んだ。午の刻ごろには日が照ってきた。

●桂王府

城内に入り、桂王府の前を通り過ぎる。桂王府は、衡州城の中にあって、円形で城市の半ばを横に貫いている。朱色の垣根と碧の瓦で、まことに新しげで美しい。前面の坊標には「夾輔親潢（皇帝を補佐する皇族）」と書かれており、正門には「端禮（端正礼儀）」の語が記されている。

●一対の白獅子像

門前に二頭の獅子が対峙している。その色は純白である。耒江の内陸百里のところから運ばれてきたと伝える。その地で、はじめはこの石は存在していなかった。ところが王府を建設する段になって、忽然と大地が裂けて洞穴が開き、ふたつの石筍を得た。どちらも高さが一丈五尺あまりもあり、全身が光沢を帯びた白色だった。そこでこれで獅子を作ったということだ。

●花薬山

ついで南門を出る。一里で、廻雁峯の麓から西に転じ、一里で花薬山に入る。山はそれほど高くはない。つまり廻雁峯の西から転じて、ぐるっとまわって府城に下った山である。諸峯は鳥や蝶が羽を広げたように伸びていて、四面を囲んで山塢を形成している。寺院がその中にあり、城壁に囲まれた内側にあるかのようだ。その寺は高く大きく広大で、そのあたりでは第一である。思うに、城北の桃花冲は、多くの静室が星座のようにつらなっていたが、ここ城南の花薬山は、ひとつの寺院が独立しているところだ。寺の名は報恩光孝禅寺という。寺のうしろの階段を真っ直ぐ上る。山頂には紫雲宮がある。道観である。この場所は、空高く聳えており、四周を眺望できる。

●報恩寺

報恩寺に還り、托鉢僧の覚空に遇う［彼は興道の人である］。彼は私より後にこの地に来たのだが、私よりも先にこの寺に至っていたのだった。そこで方丈でしばらく休息する（覚空とも語り合ったのだろう）。

●偽の宝物

宋徽宗の弟の上表文を見る。その弟は法名は瓊俊といい、皇族の身分を捨てて雲水として地方を遊覧したのであった。その当時、衡州の知府であった盧景魁の子が、寺に酒を持ち込んで宴会をしようとして、瓊俊に叱責されて辱められた。知府の盧は瓊俊をつかまえて牢獄に収監した。瓊俊はこっそりと、この上表文を書き、獄卒の王祐に宮中に入って奏上させた。事情を知った徽宗は、盧景魁を斬り、王祐を役人として取り立てた。寺にあった上表文と徽宗の詔令によれば、以上のようなことであった。寺僧はこれをもって宗門の一大盛事だとしている。しかし、上表文の中では、衡州とすべきを邢州としており、詔令の盧景魁を斬るくだりでは、邢を改めて衡としており、且つ王祐を衡州の太守としている。

このお話ははなはだ粗略でいいかげんである。恐らくは、このお寺で捏造したもので、当時の事実を伝えるものではないのであろう。

●城市の西を通って緑竹菴へ帰る

寺を出て、城市の西側に沿って、大西門・小西門を過ぎる。城外には、たくさんの大きな池や堤防が城を囲んでおり、市街地が連続している。

七里で、東北に草橋を過ぎる。さらに又た二里で、緑竹菴に入る。已に薄暮であった。

この日は雨はすでに止み晴れていたが、中夜に及んで、雨音が再びしとしとととしてきて朝に至るまで止まなかった。

［二月九日・十日］

《概要》九日は、出発の準備をし、一旦乗船したが、買い物のために城内にもどったところ、舟が移動していた。あわてて探し、やっと乗船できた。舟に残っていた静聞の対応に対し、不満を述べているようである。十日はやっと出港するも五里しか進まずに停泊。

■本文の部

初九日

雨勢不止、促静聞與顧僕移行李舟中、而余坐待菴中。將午、雨中別瑞光、過草橋、循城東過瞻岳・瀟湘・柴埠三門。入舟候同舟者、因復入城、市魚肉筍米諸物。［大魚毎二三月水至衡山縣放子、土人俱于城東江岸以布兜圍其沫、養爲雨苗*1、以大艑販至各省、皆其地所産也。］過午出城、則舟以下客移他所矣。與顧僕攜物匍匐雨中、循江而上、過鐵樓及廻雁峯下、泊舟已盡而竟不得舟。乃覓小舟、順流復覓而下、得之於鐵樓外、蓋静聞先守視於舟、舟移既不爲阻、舟泊復不爲覘、聽我輩之呼棹而過、雑衆舟中竟不一應、遂致往返也、是日雨不止、舟亦泊不行。

初十日

夜雨達旦。初渉瀟湘、遂得身歴此景、亦不以爲惡。上午、雨漸止。迨暮、客至、雨散始解維。五里、泊於水府廟之下。

●校勘

＊1雨苗　黄珅は「魚苗」の誤りではないか、とする。任国瑞らは特に注記もせず「魚苗」と訳す。魚苗は稚魚。訳注では「魚苗」とする。

■訳注の部

●訓訳

初九日

雨勢止まず。

静聞と顧僕とを促して行李を舟中に移さしむ。而して余は菴中に坐待す。

將の午にならんとし、雨中に瑞光に別る。草橋を過ぎ、城東に循ひて瞻岳・瀟湘・柴埠

の三門を過ぎ、舟に入りて同舟の者を候つ、因りて復た城に入り、魚肉筍米諸物を市ふ。[大魚毎二三月に水によりて衡山縣に至り子を放つ。土人俱に城東の江岸において布兜を以て其の沫を圍ふ。養ひて魚苗となす。大艑を以て販して各省に至る。皆な其の地の産する所なり。]午を過ぎて城を出づ。則ち舟以に客を下して他所に移れり。顧僕と物を攜へて雨中を匍匐し、江に循ひて上り、鐵樓及び廻雁峯の下を過ぐ。泊舟已に盡きて竟に舟を得ず。乃ち小舟を覓め、流れに順ひて復た覓めて下り、之を鐵樓の外に得たり。蓋し靜聞先に舟を守り視るに、舟移するに既に阻むを為さず、舟の泊するに復た覘ふを為さず、我が輩の呼して棹し過ぐるを聽するに、雜衆たる舟中に竟に一應せず、遂に往返するを致すなり。

是の日雨止まず、舟も亦た泊して行かず。

初十日

夜雨旦に達す。

初めて瀟湘を渉り、遂に身を此の景に歴するを得。亦た以て惡と爲はざる。

上午、雨漸く止む。暮れに迫びて、客至る。雨散じ始めて維を解く。五里にして、水府廟の下に泊す。

●語注

○瞻岳・瀟湘・柴埠三門　「衡陽城」図に、湘江に面して瀟湘・柴埠の二門が見える。「考察図冊」は、瞻岳門を州城の北門とし、瀟湘柴埠と鉄楼門を東側の三門として描く。

○兜　かぶと。転じて袋。

○苗　魚苗は稚魚。

○艑　大船。

●口語訳

《7》船で衡陽を出発

[九日]

雨勢が止まない。

静聞と顧僕とを催促して、荷物を舟に積み込ませることにした。そして私自身は緑竹菴で、出発の準備が整うのを待つことにした。

正午になるころに、雨の中、瑞光上人と別れて菴を出た。草橋を渡り、城の東部に沿って瞻岳・瀟湘・柴埠の三門を通り過ぎ、舟に入り、同舟の客がそろうのを待つ。(しかしそろわないので)下船して再び城中に往き、魚肉筍米などの諸物を買う[毎月二月三月に、大魚が湘江を下ってきて衡山県に至り卵を産む。土地の人々は、みんなして城東の江岸で、布の袋を使って、産卵で沸き立っているような水面の飛沫を囲い取る。そうして採取した魚卵を孵して稚魚にする。(その稚魚を)大きな舟で各省にまで送って販売するのである。全国にある稚魚は全てこの地の産物なのである]。

正午過ぎに城を出る。(ところが船着き場に行くと)舟はお客を降ろして他の場所へ移動したようで、そこにはいなかった。(そこで)顧僕とともに買い物した荷物を攜えて、雨の中を這うようにして舟を捜す。湘江に沿って遡り、鉄楼と廻雁峯の下を通り過ぎると、

そこに停泊していた舟もすっかりいなくなっていた。そこで小舟を雇い、流れに沿って再び下り捜したところ、鉄楼の外で見つけた。

思うに、静聞が舟に残って荷物を見守っていたが、舟が移動したにもかかわらず静聞は全くこれを阻むことをせず、舟が別の場所に停泊した際にも、外をうかがうこともしなかった。我々が声を掛けながら舟で通り過ぎるのが聞こえたはずなのに、たくさん舟が雑多に停泊する中にあって反応できなかったのだ。かくして我々はこんな風に何度も行き来するはめになった。

結局この日は雨が降り止ます、舟も停泊したままで出発しなかった。

［十日］

夜の雨は早朝まで降り止まない。

初めて湘江を通ることになり、遂にこうした情景の中に我が身を置くことになったが、それもまた悪くないだろう。

午前中に、雨が次第に止んできた。暮れに及んで、乗客達がそろった。雨が完全に止んで、やっととも綱を解いて出航した。

五里進んだところで、水府廟の下に停泊する。

（第二部へ続く）

訳注：薄井俊二、二〇二五年三月十一日